

13期 生演奏を楽しむ音楽科

伝統芸能の魅力④ 尺八

2026年2月6日

伝統芸能の魅力に触れる

尺八奏者・安田知博さん 演奏会&トークレポート



今回の「生演奏を楽しむ」講座では、尺八奏者の**安田知博さん**をお迎えし、演奏とトークを通して、伝統芸能の奥深さを存分に味わう時間となりました。安田さんの音色は、静寂の中に凛とした力強さがあり、会場全体が息をのむような感動に包まれました。

1. 尺八の歴史 — 千年を超えて息づく音

安田さんの解説によると、尺八の歴史は平安時代まで遡ります。最古の尺八は正倉院に残されていますが、雅楽には取り入れられず、現在の形として確認できるのは、江戸時代です。

- **名前の由来**：長さが一尺八寸
- **演奏者の歴史**：虚無僧が吹いていた楽器
- **虚無僧とは**：戦国の世が終わり、浪人となった侍たちが修行の道として選んだ姿
- **男性のみが演奏していた時代もあった**

宗教的な役割から離れ、一般の人々が演奏するようになったのは近代以降。長い歴史の中で、尺八は「祈り」「修行」「芸術」と多様な役割を担ってきました。

2. 楽器と奏法 — 竹の管から生まれる無限の表情

尺八は竹の節をくり抜いて作られ、前面に4つ、背面に1つの指穴があります。

一寸刻みで半音が変わるという独特の構造を持ち、奏者の息遣いによって音色が大きく変化します。

安田さんは、管楽器の分類もわかりやすく紹介してくださいました。

- **ラッパ類**：唇の振動を管に伝える（例：トランペット）
- **リード楽器**：薄い板の間を息が通る（例：クラリネット）
- **エアリード楽器**：道具を使わず、息と楽器の間で振動を作る（尺八）

素材は竹だけでなく、木・プラスチック・塩ビ管・3Dプリンター製など多様ですが、

「音色は素材ではなく、奏者の技術で決まる」という言葉が印象的でした。



3. 様々な尺八音楽 — 古典から現代、そして世界へ

尺八は琴・三味線との合奏が基本でしたが、後に胡弓も加わり、民謡の伴奏として発展しました。

戦後は演歌・歌謡曲にも多く使われ、細川たかしさんには専属の尺八奏者がいたという興味深いエピソードも。

さらに、テレビドラマの効果音としても活躍。

- 『鬼平犯科帳』
- 『水戸黄門』
- NHK ラジオ英会話のテーマ曲（ジョン・海山・ネプチューン）

海外でも人気が高まり、中国には約1万人の愛好者がいるほか、アメリカ・オーストラリアでは禅文化への憧れとともに広がっています。

尺八は、伝統芸能でありながら、世界とつながる現代的な楽器でもあることを実感しました。

4. リクエストコーナー — 会場が一体となった感動の時間

後半は参加者からのリクエストに応える形で、

- ポレロ
- アメイジング・グレイス
- コンドルは飛んで行く
- ビートルズの名曲

など、ジャンルを超えた多彩な曲を披露してくださいました。

尺八一本で、クラシックからポップスまで自在に表現される姿に、会場からは驚きと感動の声が上がりました。

安田さんの軽妙なトークも相まって、あっという間に時間が過ぎていきました。

■ 心に残ったメッセージ

安田さんが尺八を始めた理由は「楽器として面白かったから」。
視覚障害があることで距離を感じられることもあるが、
「演奏を通して人が興味を持ってくれたことが励みになった」
という言葉が胸に響きました。

【4 班ブログ担当】